

道徳教育の基礎

一内村鑑三の道徳論と西村茂樹の道徳論の対比から一

町田 健一

1. 序：現代に通じる明治初期の道徳の問題

封建的身分制度の崩壊と文明開化運動により、明治維新後、庶民の意識も生活も変化し、当然その生活の基盤にあった封建道徳も次第に変貌を余儀なくされた。封建時代の道徳の根幹をなしていた儒教と武士道は衰え、これに代わる新しい規範は政府にも民間にも考えられていなかった。ここに道徳の空白状態が生まれ、多くの良識ある者たちが日本の道徳の混乱を憂いて立ち上がり、啓蒙主義的理念から、または儒教主義・皇道主義の立場などから、激しい徳育論争がなされた。その中でも、宗教を強く否定して日本の新しい道徳教育を考えた西村茂樹と、キリスト教をその土台としてキリスト教道徳をはっきりと掲げた内村鑑三を比較してみることは、当時と同じように大きく時代が変化し、価値観が多様化し、いわゆる道徳の乱れが問題になっている現代の日本で、我々がいかなる道徳教育を考えたらいいのか、大きな示唆を与えてくれることと思われる。

2. 西村茂樹の道徳論

(1) 西村を徳化運動に駆り立てた要因^(注1)

西村は文政11年3月13日(1828年)、江戸辰の口佐倉藩邸に生まれた。維新後、文部省に入り、教育の進歩に対して徳育の立ち遅れを指摘して徳化

運動を推進、「日本道德論」を著している。間接的に後の教育勅語にも貢献した。父は徳川譜代藩の重臣であるとともに、海外に早くから目を向けており、また両親ともに徳が高く、人々の信望を得ていた。西村は小さい時から漢学、国学、洋学のすべてに通じ、家庭の影響からも非常に強い忠孝道德の観念が培われ、かつ東西の文化、世の中の大勢を達観できるようになっていた。思想は、深く儒教に根ざしていたにもかかわらず、16歳にして日本の歴史と現実を考えて、儒教をそのままには取り入れられぬが、多少の取捨選択をして儒学を広めるべしとの卓見を既に持っていたことは特筆に値する。

このような生い立ちを背景に、次のようなことがらが西村を徳化運動に駆り立てていったと思われる、と数江（1963）はまとめている。第1に、親譲りの正義感と小さい時から培われた儒教的忠孝倫理による鋭い感受性によって、王政復古のその時代が策略ばかりの乱世の世であることを西村が非常に敏感に受けとめ憂いたこと。第2に封建時代の道德の基礎をなしていた儒教と武士道が衰え、これに代わる道德を世が必要としていたこと。第3に、開国の世に、まず国家の安全を守るために、国内の治安と国民の意志統一を緊急に計る必要があったこと。第4に、文部大臣が代わるたびに道德教育の方針に変化が起こることに西村が問題を感じていたこと。第5に、明治5年の学制発布の際の教育方針が産業本意で、各人が立身出世をねらい、産業界で働くことにより各々がその身・家の繁栄を得ることを主張した教育思想であることを西村は強く批判、仁義忠孝を説かぬことに不満であったこと、などである。いずれにしても、西村が時代を直視し、日本を愛し、日本の道德教育の混乱を憂いて、しかも表面的な道德教育の内容・徳目を考える以前に、道德教育の土台、よりどころから真剣に取り組んだことより、われわれの学ばべきところは多い。

(2) 西村の折衷道德のよりどころ；国民道德は世教によるべきか、 (注2) 世外教によるべきか

西村は、道德とは人々がその良心の命令に従ってなすところの行為である

と言い、その道徳論を彼の良心論によって展開する。すなわち道徳の基本を良心の育成として、これをそこなう物欲（色欲、利欲、名誉欲など）を律する必要を述べ、良心の力を養い、これを助長して、物欲に負けぬようにしなければならないと言うのである。そこで西村はその国民道徳を維持する方法として、あるいは良心を助長する方法として、西洋の道徳が宗教を用いていることに触れ、その著書「日本道徳論」の中で次のように述べている。現在の日本で道徳の教えを説こうとすれば、維持する方法として世教（儒教、西洋哲学）をとらねばならないだろう。なぜなら、宗教は相争う性質を持つから、仏教かキリスト教のどちらかが滅びない限り平和はなく、これに対して、300年の伝統を持つ儒教は社会の秩序を保つのに適し、社会の指導者たちも儒教的教養を持っているからであると言う。ただし世教といえば、日本とシナでは儒教であるが、道徳を説く世教には他に西洋哲学があることにも西村は目を向けさせている。ここで西村は同じく「日本道徳論」の中で、世教の内容についても言及している。儒教と西洋哲学の長所と短所を比較考察するのである。儒教の長所として西村は、“忠孝の教えは万世一系の天位を守り、君臣の分を正しくし、国民の風俗を美しくする”と指摘、実践上の優れていることを挙げ、欠点としては、“禁戒が多く勸奨の言葉が少なく退歩的であること、尊属に対して有利で卑属に不利、国の秩序を守るため仕方がないが少し行き過ぎであること、男尊女卑の教えが多いこと、古を是とし今を非とし、ことごとく昔に倣うことを求めて今日に合わないこと、西洋における心理学などの学問の発展と儒教の理論が合わないこと”などを挙げている。これに対して西洋哲学は、“理を師とし人を師としないことから、卓越した人間が出るたびに古人の所見の上にさらに一層の発見がなされ、いよいよその学問が精密深遠となること”を長所とし、欠点としては、“知ばかりを論じて行いを論ずるのに弱いこと、哲学には治心の術がないこと、皆、古人の上に出ようとしてことさらに異説を立てること、哲学にはいくつもの学派があって、道徳の原理が異なり、それによって実行の項目も異なること”を挙げている。よって世教をとるとしても、儒教も西洋哲学も1つでもって日本の

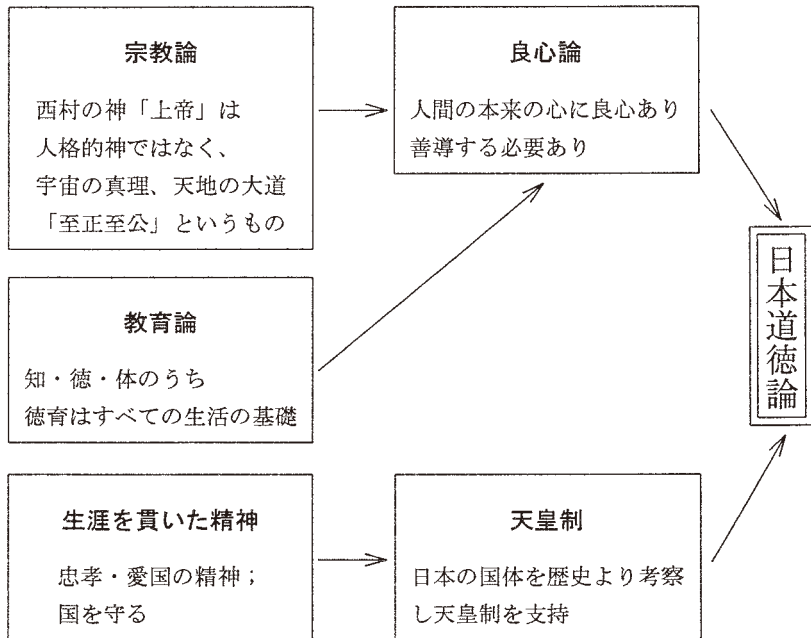
道徳の基礎と出来ず、各々の精神をとることになると述べている。実践上儒教が優れていても、西洋道徳が進歩的であるのに対して儒教道徳は退歩的・保守的であり、また西洋哲学は精密周到だが実践を説くことにはおろそかであるから、西洋哲学を儒教の実行力と調和させようとするのである。ここに宗教による裏打ちを拒否した、道理による折衷道徳が西村によって作り上げられるのである。

このようにして西村は日本道徳を維持する方法として世教による方法を採用したわけであるが、宗教を捨てたため、次にその道徳論の新しいよりどころを模索する必要に迫られたのである。そこで西村は世界と日本を歴史的に見渡し、そのよりどころを皇室に置くのである。（それには西村生来の愛国心、儒教倫理からくる天皇に対する忠孝の精神が働いたわけであるが、これについては次の節でまとめることにする。）西洋がキリスト教の神をその道徳の基礎に置いて徳育問題の統一を得ていること、ロシアでは皇帝が宗教の大教主を兼ねており、うまく機能していることを挙げ、日本の国民道徳の基礎あるいはそのよりどころを、日本の歴史から皇室に置くのである。すなわち、道徳の基礎を信仰の対象としての神に置かず、歴史的見地から日本の国体を考え皇室にとったのである。日本には多くの神々があり、それぞれに帰依する人々を日本国民として一つにまとめる必要があったことを考えれば当然の帰結と言えるであろう。

(3) 日本道徳論を生み出した西村の思想^(注3)

国民道徳としての日本徳論を支える西村の思想を図式化すると、次頁のようになると思われる。

この図式からも分かるように、西村の日本道徳論を支える1つの柱として、彼の宗教論と徳育を重んじる教育理念に裏打ちされた良心論がある。西村は人格神としての神を認めないわけであるが、宇宙には、“上帝”と彼が呼ぶ真理、天地の大道、至正至公というものがあって、おのずと人間本来の心の中にも良心というものがあると言うのである。しかし、心には良心の他に欲



心、情、知もあり、これらはまた体と同時に成り立っているもので、天与のものであると言う。そこで邪悪を為しやすい欲心と情を抑制し、良心を善導し、これらを良心の命に従わせる必要を言うのである。また、西村は教育を知育（西洋から良いものをさらに取り入れる）、体育（国家の実際の用に応じ、富国強兵の実を顕現させる）、徳育（国家にとって良善たる国民の育成を目指す）に分け、その中で特に荒廃した世にあって徳育を教育の根本とすべきことを打ち出し、これが彼の良心善導の考えにつながり、彼の徳化運動を進めることになるのである。

日本道徳論を支えるもう1つの柱として天皇制を重視する西村の思想が挙げられる。これは西村にとって、幼少時代から培われ、生涯を貫いた精神でもある儒教倫理からくる忠孝と愛国の精神の対象であり、と同時に西村の鋭

い歴史的ものの見方によるものである。「往事録」の中で、西村が自分の全存在は祖先から考えおこさねば把握できないと述べているように、彼の歴史的ものの見方は、彼の思想行動を理解するために重要であって、このものの見方によって西村は日本の国体を考え、皇室にその道德論の基礎を見出したのである。また、西村が彼の道德論のよりどころとして天皇をとった考えの裏には、“人類の愚妄に乗じて非真理を教えるもの、国家のためにならないもの”として、信仰宗教を徹底的に嫌っていたことも見落としてはならないのである（西村の宗教観）。先にもまとめたように、西村が宗教以外に日本道德論のよりどころを暗中模索していたことを押さえねばならない。

補足として日本道德論の目的とその範囲についてまとめておく。西村は道德の目的として次の5箇条を挙げている。すなわち、①我身を善くする。②我家を善くする。③我郷里を善くする。④我本国を善くする。⑤他国の人民を善くする。の5箇条である。国の差別なく、“上帝”より見れば全世界の人民は一視同仁なるべきという第5条は、ただし、“まず第1より第4の条目を履行し、その功を奏したる上にて第5条に及ぶべきことなり”であって、プロテスタンティズムで言う真の世界主義ではない。まず自国を、余裕があれば他国へという忠孝愛国の精神から出たものであり、その範囲は日本国内までであって、“国のため”が実質上その頂点であった。

その後、明治23年の教育勅語發布までは多くの德育論争がなされ、西村の儒教的忠孝倫理の再編成による、国民徳化の教育思想はすぐに受け入れられなかった。しかし、数江ら（1963）は西村の道德論には彼自身の思想の内面的な必然性があったと言うべきで、積極的に政府の御用学者として立ち、政府の教学方針を代弁したわけではない。彼の思想の保守的性格は道德教育の根源を天皇に求める点にあったが、その思想は必ずしも政府のそれと同一ではない。国民と国家の問題をその基本的な性格とした明治の啓蒙思想の1つの帰結を示したものと言えようと評価している。

このようにして西村は、良心論、忠孝・愛国の精神をもって、天皇制をよりどころとした道德論を打ち立てたのであるが、これに対して、内村鑑三も

彼なりに忠孝・愛国の精神を強調しながら、神に源を発する道徳論をまとめている。ただし、内村の忠孝・愛国の精神に対する言及は、当時の国家主義思想に対する日本人キリスト者の弁明であろう。

3. 内村鑑三の道徳論

(1) 内村のおいたちとキリスト教^(注4)

内村は文久元年3月23日(1861年)、江戸小石川葛坂上において上州高崎藩邸の長子として生まれる。内村家は代々高崎藩の表用役を勤め禄高は50石であった。母方の祖父は正直者、禁酒家であり、祖母は働き者で借金を絶対にすることなく、人を決して欺くことをしない人であった。母も祖母譲りの働き者で家庭をよく治めていた。父は教養があり、詩歌に親しみ、人を統率する術にたけており、また外国の神仏をさげすむ儒教学者で、儒教の高い教養を持ってその藩主に忠誠を尽くしていた。このような家庭で育った内村は少年時代から、“宗教的感受性”を備えていたと考えられるが、内村自身はこれらの人物(家庭)の中にはその起源を認めていない。潔癖な家庭によって多くの悪徳から守られたことは認めても、キリスト教徒になる要素を家庭の中に見出していない。少年時代に友達に誘われて教会に行ったことも物見遊山であると言い、1977年東京英語学校から札幌農学校へ入学した時も、なお祖国の神々を拝み、忠君愛国の精神を持っていた。ところが、上級生の圧力により強制的にキリスト教に改心する誓約書を書かされた後、宇宙には唯一の神がおられ、多くの神々などいないということを教えた時、内村はここに多くの神々、迷信から解き放たれ、“何と嬉しい知らせか、心がはればれた”という劇的な体験をしたのである。“唯一の神”という考え方は内村にとって、非常に霊感的であって、そこに精神的自由を感じ、新しい活動力が与えられたのである。

このようにして過去の儒教的な神々や迷信から解き放たれて大転換をした内村は、祈りを通して、また天然を通して、天然の神に語りかけようとして、

キリスト教に深く入っていったのである。ここにおいて全宇宙を治めたもう神、万物の造り主としての神との出会いを経験し、彼の生き方すべてが変わっていったのである。

(2) 内村の道徳論のよりどころ；上からの道徳^(注5)

内村はその論文「東洋道徳と西洋道徳」(山本 1963, No. 24)の中で、東洋の道徳と西洋の道徳とを比較している。東洋道徳は人に害を及ぼさなければ良いという消極的道徳であって、強いらなければならない善行をなさず、村政国政に自ら励まず、よって東洋にはそれゆえに独裁政治が栄えるのだと言う。これに対して、西洋道徳においては、山への隠遁は罪となり、公事には進んで参加をするという積極的な道徳となって、それゆえに西洋には自治政体ができるのだとする。これらの比較をしながらも内村は、道徳というものは宇宙的なものであるべきで、東西の区別などあるべきではない、よって良い方をとるべきだという。このような考え方によって「キリスト教道徳論(Ⅰ)(Ⅱ)」(山本 1963, No. 22)をまとめている。

内村はこの中で次のように言う。キリスト教道徳は人の道徳ではなく神の道徳である。神にならう道である。キリスト教は道徳ではなく福音であるが、その中に単純だが確固たる道徳がある。そしてその道徳は、“神を愛すべし、人を愛すべし”の言葉に言い尽くされ、全ての道徳がこの中に入ってしまうというのである。その動機は愛である。キリスト教道徳は人を人として敬わねばならないことを説く。なぜならば、人は神の像にかたどられたものであり、神の前に一人一人が大切な魂であって、人は人であるがゆえにどの人も貴いからである。よってキリスト教道徳は神に対する誠実さをもって何人にも対する。ただ盗まない、人を虐げないと言って道徳を行ったとは言えない。人を軽く見、低く見、魂の真価を認めなくてはキリスト教道徳に反することになる。神を愛するからこそ、神の愛したもう一人一人の人間をも愛するのである。キリスト教道徳のよりどころは、万物の造り主である神である。国に最も必要なものは、兵力や知識ではなくて道徳であるが、道徳とは必ずし

も国家の為の仁義忠孝などの外面的な行為にはとどまらない。何のために善をなすか。何のために仁義忠孝をなすか。人の目につかない心の奥底を見ることのできる実在者への愛のゆえである。道徳の基礎をここに定めなければ、高貴な世界的行為は現れ得ない。神に対する愛による道徳があって、人に対する愛による道徳が成り立つのである、と神に源を発する道徳のレベルの高さをアピールしている。

(3) 内村におけるキリスト教と国家の問題 ^(注6)

文明開化に伴い、西洋から種々の文化を取り入れながらも西村のようにキリスト教を排斥する議論に対して、内村は次のように反論し、内村の説く道徳の基礎であるキリスト教と日本との調和を見出そうとする（山本 1963, No. 24）。“西洋の文物（鉄道・電話・憲法・法律など）は何でも要る。しかし1つだけ西洋の宗教キリスト教とその道徳は要らない。日本道徳だけで充分である。物質文明は学び、精神文明は西洋に教えよ”という論に対して、内村は、「ヤソははたして要らないか。道徳ははたして忠孝だけで充分であるか。…法律を重んずるの心はいかに、その隣人を敬うの精神はいかに。…日本人は西洋文明の外殻を採用するに汲々として、その核実は全然これをしりぞけたのである。」（P202-203）と反論、さらに次のように議論する。キリスト教は、多くの世界の偉人の信仰していた宗教であって、これらの人物及びその活動に学ぶに際しては、その人物の根本にある宗教に目を向けねばならぬであろう。また、もしキリスト教が日本の国体と相容れないものならば政府は既にそのキリスト教を禁じているはずであるが、禁制がない以上キリスト教と国体とは併立するものとみる。相容れないとすれば、世界の大事件である。なぜならば、キリスト教は世界の宗教であり、これに反するものは世界に反することになるからだ。文明国の一員の日本国が世界の宗教たるキリスト教とその存在の根本を異にするはずがない。日本は世界の勢力であり、キリスト教は世界の宗教であって、日本に宗教がいるならば、キリスト教が必要である。しかもキリスト教は西洋のものであるというが、その発祥

地はもともとアジアであって、キリスト教がアジアに戻ってきたに過ぎないのだと言う。いささか乱暴で苦しい議論であるが、このようにして内村は何とかキリスト教を日本に根付かせようとしているのである。道德のための宗教でなくて、福音としてのキリスト教の発布が即人間の生き方を替え、真の道德へとつながっていくとしている。

キリスト者として、日本の国体としての天皇制に対する対決の仕方は、個人の信仰としてはキリスト教、国民としては天皇制を肯定という、どちらをも立てるといふ共存的タイプであった。個々の人間の自由ということについては、天皇制国家の束縛に批判を持ち、天皇や勅語を神として拝むことは拒否したが、儒教の教えをたたき込まれた人間として、キリスト者と天皇制が本質的に矛盾するものとしての徹底的な対決の姿勢をとることはなかった。

次に西村の忠孝愛国の精神と比較して内村における忠孝愛国の問題を扱うことにする。西村の場合は道德を支える忠孝愛国の精神が、内村にあっては神からくる道德、そしてそこからおのずと出て来る忠孝愛国の精神であって、その思想の中で占める位置と同時にその内容も異なってくるわけである。

(4) 内村における愛国情の問題 (注7)

キリスト教に愛国情がないという考えは誤りである。逆に、愛国情は偏狭な心であってキリスト信者にはふさわしくない、人類愛こそキリストの心であるから、自分の国を特別に愛するという事はキリストの精神に背くという考えも間違っている、と内村はキリスト教信者にも愛国情があるということキリスト者の弁明として述べている。愛国情を除いてこの世に貴いものはない。キリスト教に愛国情がないならばこの教えは早くから消えてしまったであろう。真のキリスト教の起こるところに愛国情が起こる、とまで彼は自分の主張を続ける。しかし、内村は西村のような国家最優先の愛国精神に対しては次のように言い切る。全世界が我が国のために存在するという考え方は誤った愛国情であって、我が国が世界のために存在するのである。我は我が国に尽くして世界人類のために尽くすのだ。“I for Japan, Japan for the

world, the world for Christ, and all for God.”の流れの中で愛国心を捉えているのである。愛国は人類愛、世界愛につながるものであって、それらはすべてキリストに帰するのである。「国のため」即「キリストのため」であって、この2つは不可分離のものである。

どのような愛国心かと問われれば、自分の愛国心はイザヤ、エレミヤ、エゼキエル、イエス、パウロらによって表されたもので、最も高い、もっとも強い愛国心である。正義において日本を世界一の国にしたい。義のために日本を愛するのだという。この愛国心が永久に国を益し、世界を益する愛国心だというのである。愛国心の表し方としては、「国に尽くさんと欲せば必ずしも政治または軍事に携わるの要はない。…我に賦与せられし能力に応じ、わがなすべきことを忠実になせば、それ以上の愛国的行為はない。…美術も音楽も作詞も説教も、忠実にこれをなせば、国を興し、民を化するの事業である。…わがなすべくこの世に送られし事を忠実になして、われは国家を益し、社会を改め、しかり全宇宙を動かすことができる。」(山本 1963, No. 24, P 246) と説くのである。愛国の精神は強いても燃えるものではない。「神と人々に対する義務を高調し、…ことさらに愛国を説かずして…」(山本 1963, No. 22, P36) とキリスト者の愛国の精神を神から出る予言者的愛国の精神として捉えているのである。

(5) 内村における忠孝の問題 (注8)

忠孝の問題についても先の愛国心の問題と同様に、忠孝をキリスト教が説かないという批判に対して、命令が少ないことがその実行の貧弱なことに結びつかない、神と人への義務を高調することによって、ことさら説かなくても忠孝の気持ちは起こると反論する。

内村は西村のような忠孝道德の限界について次のように述べている。町に出る子弟に仁義忠孝の道を教えても、誘惑の多い町へ出すには不安である。忠孝道德は従順の民を作るが、進歩的な民を作らない。また道德は忠孝だけでは不十分であって、これだけでは本当の家はできず、法律を重んずる心も

なく、隣人を真に敬う精神もなく、国民の憧憬する理想もない……と限界を述べている。内村は、我々日本人には皇室に対する義務があり、町に対する義務があり、家に対する義務があり、兄弟・同族に対する義務があるわけであるが、ここに忠孝の究極として魂を造られた神に対するもっとも大きな義務があると言う。キリスト教の神に対する忠がまず存在し、神と親しい関係になれば、先の忠孝道德の限界を超えられるとする。さらに、儒教的道德とキリスト教道德における忠孝の違いについて、次のような例も挙げている。キリストによって人たる者に真の尊敬がわき、父母に対する忠孝の精神も起こるわけであるが、キリスト教の忠孝は、ただ父母を喜ばせるためでなく、彼らの永遠の利益・幸福を図るための者であって、それゆえ真の忠孝は不忠・不幸のように見えることがあると弁明している。

(6) 内村における個の自由・主体の問題 ^(注9)

内村は、自由は人の生命であると言い、真の自由について次のように説明する。自由とは気ままな自由、政治的自由、知識的自由を言うのではない。宇宙万物の造り主の心を動かし得る自由、彼の子たる自由、自由に善をなし得る自由、罪の奴隷から解かれる自由であって、自由とはもともと神に従う自由である。自由の進歩とはこの自由の進歩を言うのである。よって、自由とは単に自己以外に何らの束縛をも受けないという消極的なものではなく、善悪を判別して悪を避け、善を行う積極的な能力である。よってキリスト教なくして真の自由はない、と言い切る。内村はここで例として政治界を挙げ、日本には憲法があり、人の人権・自由が保証されているが、実際には政治界には自由が存在しないことを言っている。

このキリスト教における自由のゆえに、個としての人間の主体性が確立されるのである。神の前にはまったく人種の差別はなく、一人一人が神にとって平等で大切な魂であり、個々が独自の考え・選択で、神の前に、人の前に出られる自由で主体的な人間である。よって西村の折衷道德では、国家優先のための全体の一部としての人間のあり方が強調されたのに対して、キリス

ト教道徳にあつては、人は子たる権利と威厳とを互いに知覚享有し、個々人を自由な主体的な人間として尊重するのである。

4. 考察；まとめに替えて

西村と内村の対比から多くを議論できると思う。しかし、今回は紙面の都合上と「教育研究」の総テーマより、キリスト者の使命、ひいては国際基督教大学の使命とだぶらせて本稿のまとめとしたい。

現代社会における道徳の基調は、民主主義の精神であると言われている。自由、平等、権利、義務などの尊重からなるいわゆる人格尊重の精神である。道徳的態度、そしてそれを支える良心の育成は民主主義道徳成立の基本に関わる重要な問題である。しかし、近代民主主義を根底で支えてきたプロテスタント的信仰や倫理が現代日本において失われてしまっているならば、すなわち、戦後の日本において、民主主義道徳教育をめざしながら、欧米にあつてはその根底を為していたプロテスタンティズムを否定するならば、日本の道徳教育を憂い考えている者たちは、それに替わる基礎、よりどころをちょうど西村のように模索しなければならないと考える。それがなされなければ、日本の民主主義は多数の利益を押し通す合理的手段として、その形式だけが一人歩き始めたり、道徳教育においては、良心及び道徳的態度というものを根本で支える基礎がないことになってしまう。

キリスト教に限らず、一般に信仰に生きるものはその道徳の基礎を神に置く。その良心及び道徳的態度は、個人的に心に語りかけてくる神の声であり、また神を中心とする高いレベルにおける他者への思いやり、自由、平等、権利、義務などの人格尊重の態度である。道徳的自己は道徳的に生きようとするほど自己の有限性、無力性を自覚する。そして、無限の真実在である神に接して、すなわち、宗教の立場に進むことによって道徳は完成される。

キリスト教を根付かせる働きを切り離して、キリスト教道徳を広めることはできない。キリスト教道徳の香りを知らせて後にその神を考えさせること

もできよう。しかし、キリスト教道德の基礎であるその神を受け入れるまでは、その道德を真に自分のものとしたことにはならない。キリスト教学校・大学はキリスト教普及の一項をその看板から降ろすことなく、学問を通し、日常生活を通して、はっきりとその神を指し示し、道德的に荒廃した現代社会の建て直しに積極的に貢献する必要がある。それはちょうど、道德の荒廃した明治期に西村が神を否定して日本の学校教育における道德教育を成り立たせようとした動きに対して、内村が高い次元のキリスト教道德を掲げたように、今日のキリスト者もこの大きな挑戦を受けて立つ必要があると考える。

参考・引用文献

- (1) 海後宗臣 1981 海後宗臣著作集 第3巻 教育思想研究 p.426 - 488
東京書籍
数江教一編 1963 東洋思想の遍歴：日本の倫理思想史 p.275 - 354
学芸書房
日本弘道会 1913 泊翁西村先生 p.1 - 236 大江書房
日本弘道会 1976 西村茂樹全集 第3巻 往事録 p.457 - 720 思文閣
高橋昌郎 1987 西村茂樹 p.1 - 26 吉川弘文館
- (2) 稲富英次郎 1965 道德教育論 p.134 - 155 福村出版
海後宗臣 1981 海後宗臣著作集 第3巻 教育思想研究 p.465 - 488
東京書籍
数江教一編 1963 東洋思想の遍歴：日本の倫理思想史 p.322 - 354
学芸書房
西村茂樹 1987 日本道德論 p.9 - 26 岩波ブックセンター
日本弘道会 1913 泊翁西村先生 p.258 - 354 大江書房

- 日本弘道会 1976 西村茂樹全集 第3巻 往事録 p.457 - 720 思文閣
高橋昌郎 1987 西村茂樹 p.88 - 220 吉川弘文館
- (3) 海後宗臣 1981 海後宗臣著作集 第3巻 教育思想研究 p.465 - 488
東京書籍
数江教一編 1963 東洋思想の遍歴：日本の倫理想史 p.322 - 354
学芸書房
西村茂樹 1987 日本道德論 p.20 - 51 p.39 - 105 岩波ブックセンター
- 日本弘道会 1913 泊翁西村先生 p.258 - 354 大江書房
日本弘道会 1976 西村茂樹全集 第3巻 往事録 p.457 - 720 思文閣
高橋昌郎 1987 西村茂樹 p.88 - 220 吉川弘文館
- (4) 山本泰次郎編 1962 内村鑑三信仰著作全集2 教文館 余はいかにして
キリスト教徒となりしか p.3 - 175
- (5) 山本泰次郎編 1963 内村鑑三信仰著作全集22 教文館 キリスト教道
徳 p.17 - 38 普通道徳 p.38 - 42 真理 p.133 - 160
山本泰次郎編 1963 内村鑑三信仰著作全集24 教文館 東洋と西洋 p.
233 - 240
- (6) 武田清子 1959 人間観の相剋 p.3 - 26 弘文堂
山本泰次郎編 1963 内村鑑三信仰著作全集22 教文館 キリスト教道
徳 p.17 - 38
山本泰次郎編 1963 内村鑑三信仰著作全集24 教文館 日本とキリス
ト教 p.180 - 225 国家 p.253 - 304 日本人観(2) p.91 - 170
- (7) 武田清子 1959 人間観の相剋 p.3 - 26 弘文堂
山本泰次郎編 1963 内村鑑三信仰著作全集22 教文館 キリスト教道
徳 p.17 - 38
山本泰次郎編 1963 内村鑑三信仰著作全集24 教文館 日本とキリス
ト教 p.180 - 225 愛国心 p.241 - 252
- (8) 山本泰次郎編 1963 内村鑑三信仰著作全集22 教文館 キリスト教道

徳 p.17 - 38 普通道德 p.38 - 42

山本泰次郎編 1963 内村鑑三信仰著作全集 24 教文館 日本とキリスト教 p.180 - 225

- (9) 山本泰次郎編 1963 内村鑑三信仰著作全集 22 教文館 自由 p.169 - 176 自由意志について p.177 個人主義 p.178 - 179

山本泰次郎編 1963 内村鑑三信仰著作全集 24 教文館 日本とキリスト教 p.180 - 225 人種問題 p.226 - 230 国家 p.253 - 304

**Foundation of Moral Education:
Comparative Study of Kanzou Uchimura
and Shigeki Nishimura
(English Résumé)**

Kenichi Machida

The purpose of this article is to compare the Uchimura's Christian model of moral education with the Nishimura's "eclectic" model. Specifically, the paper seeks to discuss how the foundation of moral education should be set. The author believes that Christians today need to consider the same challenge as Uchimura did.

Both Uchimura and Nishimura were seriously concerned about immorality in Meiji era and made efforts to reform Japan through the introduction of moral education. Because Nishimura rejected any religious bases, he developed his own moral education based on the Emperor system of Japan from his historical point of view, supported by thought of "Jukyo" and western philosophy. Uchimura also tried to reform Japan morally. He preached the need of Christianity as the foundation of Japanese moral education, explaining that the actual practices of Christianity were really superior to those of "Jukyo."

Today, confronted with same problems, most educators insist on democratic moral education but deny Christianity which is the foundation of western democracy. If so, they have to grope for the foundation of their democratic moral education as Nishimura did. Christians also have to introduce Christianity as the foundation of their moral education not only to introduce the "flavor" of it.